YUTAKA SADO PRODUCE OPERA 2010

Candide

NEWS 佐渡裕プロデュースオペラ2010「キャンディード」
公演直前特別ニュース
7月24日～8月1日 兵庫公演
8月6日～8月8日 東京公演

佐渡裕プロデュースオペラ2010「キャンディード」制作発表記者会見レポート

桜が咲き誇る4月12日（月）は、佐渡芸術監督にとって特別な日となりました。米国から、“キャンディード”の作曲家である、故レナード・バーンスタインの長女、ジェイミー・バーンスタインさんをお招きして、大阪と東京の二都市で「キャンディード」制作発表記者会見を行ったのです。

なぜ今、「キャンディード」なのか、どういうメッセージが込められた作品なのか、この作品を通して何を伝えたいのか・・・。ジェイミーさんとの会話は、まるでかつての師と弟子が、長い時を経て久方ぶりの対面とその成長ぶりを喜びあうよう。と同時に、この取り組みがいかに意義深い事であるかを確信させてくれる、貴重な機会となりました。

ここでは、その感動的な会見の内容をリポートいたします。

会見会場には多くのプレスが駆けつけた

Yutaka Sado（佐渡 裕）

佐渡監督：しゃべり方がお父さんにそっくりで、本当に懐かしい。バーンスタインはすばらしい先生で、厳しさも持っている人でした。こうして横から「ユタカ」と呼ばれると、隣でレニーが応援してくれているように感じます。

Jamie Bernstein（ジェイミー・バーンスタイン）

ジェイミー：ええ、ずっと支えていますよ。ユタカ、もし父が、あなたが「キャンディード」で成し遂げようとしていること、そしてあなたのすばらしいオーケストラを見たならば、きっと誇りに思ったことでしょう。

開館5周年を迎える 兵庫県立芸術文化センターと 佐渡裕芸術監督が取り組む ビッグ・プロジェクト

佐渡裕プロデュースオペラ2010「キャンディード」について

当センターが開館5周年を迎える本年は、奇しくも、佐渡裕の恩師レナード・バーンスタインの没後20周年でもあります。指揮者としてのバーンスタインの勇姿はもう見ることができませんが、作曲家としての業績は、今後ますますその重要性が高まっていくことでしょう。当センターではこれまで、折に触れて、氏の作品を取り上げてきましたが、佐渡監督の念願であり、この記念すべき年にふさわしい傑作であることから、取り組む運びとなりました。

「キャンディード」は、18世紀フランスの哲学者ヴォルテールの小説が原作で、主人公キャンディードが想像を絶する苦難に苛まれながらも、それをひとつひとつ乗り越え、最終的にひとつの哲学を見出していく物語です。「この世界は最善のものとして与えられているのか、それともまったく希望のないものなのか。いや、そうではなくて、最後には目の前にある我々の庭、大地の上で、ベストを尽くしていくべきではないのか」ということが問いかけられています。

今年は阪神・淡路大震災の15周年にもあたります。苦難の中から希望を見出すというテーマは、何よりも、震災からの復興のシンボルとして創設された当センターの使命と重なるものです。

公演へ向けての抱負 ～佐渡裕（芸術監督・指揮）

見事なロバート・カーセンの演出

1989年、バーンスタインはロンドン・シンフォニーとの演奏会で演奏会形式の「キャンディード」を指揮し、映像に残しました。実際に、その場に立ち会い、感じたことは、まず音のおもしろさです。美しいデュエット、コロラトゥーラを駆使したクネゴンデのアリア、合唱など、音楽のあらゆる要素が含まれている。一方で物語は、死んだ人間が生き返るようなめちゃくちゃな展開でしたから、正直戸惑いを感じました。ぼくはこれまでに30回以上指揮をしてきたと思います。音楽の魅力に惹きつけられる一方で、「この複雑な話をどうもっていけばいいのか？」という思いがいつも背中合わせにあり、もやもやとした気持ちを持ち続けてきました。

その“もやもや”を解決してくれたのが、ロバート・カーセンという天才です。彼の演出は見事です。あちこちに場面が飛んでいく物語をうまくまとめあげ、ヴォルテールの時代を舞台とした内容を「自分たちのもの」として受け止めることができるようすべてがクリアにされています。

ロバート・カーセン（演出）

なぜ「キャンディード」なのか

現代はインターネットの時代です。クリックひとつで世界中に飛んでいけるようになりました。一方で、ヴォルテールの時代、それからバーンスタインがこの作品を作った1950年代と同じく、戦争、宗教、災害などの問題はなくなることがありません。世界には様々な考えの人間がいます。ポジティブな人、文句ばかり言う人、世の中をスルスル生きていく世渡り上手な人。フィナーレの「私たちの畑を耕そう」という曲には、そうした意見の違う者同士が手をつなぎ、我々の町を、社会を作っていこうという願いが込められています。

震災の街、阪神間の真ん中に兵庫県立芸術文化センターは建ちました。街のエネルギーがこの劇場を作り上げました。劇場はまさに人間の証明だと思います。色々なことが重なったこの年に、バーンスタインにお世話になった人間の一人として、お礼を捧げる気持ちでこの作品に取り組みたいと思っています。

父の作品「キャンディード」 ～ジェイミー・バーンスタイン

「キャンディード」は誰もが楽しめる作品です。父はあらゆる音楽を愛し、その橋渡しをしたいと常々思っていました。「キャンディード」にもオペラ、オペレッタ、ミュージカルなど、ヨーロッパの様々な音楽が取り入れられています。すばらしい旋律、ユーモア、哲学、ロマンス、歴史といった要素もふんだんに散りばめられています。

今回、芸術文化センターを訪れて、その中で行われている公演やオーケストラの素晴らしさを目の当たりにしました。そして、その中心に佐渡さんが父と同じ精神を持って活動されていることで、父がずっと思い続けてきたことが調和していると感じました。

最終曲の「私たちの畑を耕そう」はすばらしい曲です。ヴォルテールの原作では、フィナーレは厳しく皮肉に満ちたものになっていますが、父は、それをもっと情緒的で希望を含んだものに仕上げました。この曲は、まさに今の芸術文化センターにふさわしいものだと思います。父の没後20年、震災から15年、開館5周年という一連の記念が重なるこの年、みなさんが自分たちの地域を、自分たちの畑を耕そうとされている姿をこの目で見ることができて、本当に光栄です。

ジェイミー・バーンスタイン Jamie Bernstein

ナレーター、作家、アナウンサー。父親は作曲家で指揮者のレナード・バーンスタイン。母親はピアニストで女優のフェリシア・モンテアレグレ。氏の芸術的遺産のアピールを使命とし、コンサートやラジオ番組への出演・制作、講演、執筆等の活動を行っている。